

下剋上

佐竹昭広

の文学



ちくま学芸文庫

ちくま学芸文庫

# 下剋上の文学

佐竹昭広



筑摩書房



ちくま学芸文庫

## 下剋上の文学

一九九三年二月五日 第一刷発行

著者 佐竹昭広 (さたけ・あきひろ)

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前二―六―四 ㊤二二一

振替東京六―四―一二三

案内 ○四八―六五一―〇〇五三 (サービスセンター)

装幀者 安野光雅

印刷所 株式会社精興社

製本所 株式会社鈴木製本所

ちくま学芸文庫の定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

©AKIHIRO SATAKE 1993 Printed in Japan

ISBN4-480-08039-2 C0195

ちくま学芸文庫

# 下剋上の文学

佐竹昭広

筑摩書房



## 目次

怠惰と抵抗——物くさ太郎——

7

成りあがり——一寸法師と物くさ太郎——

44

無知と愚鈍——物くさ太郎のゆくえ——

77

\*

弱者の運命——御伽草子と狂言——

105

勝利の歌——狂言の主従——

133

嘲笑の呪文——狂言の山伏——

160

有世の面影——狂言の陰陽師——

188

喜劇への道——狂言の「をかし」——

217

転落の序章——天正狂言本「こけ松」のばあい——

242

\*

下剋上の文学——民話のクツチャネたち——

265

あとがき

299

新装版あとがき

303

文庫版あとがき

305

解説（上野英二）

307

# 下剋上の文学

益田勝実氏に

## 怠惰と抵抗

——物くさ太郎——

一

すべて勤勉な人間は互いに似かよっているが、怠惰な人間はそれぞれに怠惰のおもむきをことにしているものである。

信濃の国つかまの郡あたらしの郷はごったがえしの騒動であつた。国司の命令で、「<sup>なが</sup>長夫」という長期の夫役を一人、急に都へ派遣しなければならなくなつたからである。村人たちはその人選にゆううつな毎日をついやしていた。こんな貧乏くじをいっただれに押しつけようというのだ。できることならだれにも押しつけたくない。だが、どうしてもだれかに行つてもらわねばおさまらない。その日も結論はでなかつた。でるだけの意見はとうにでつくしていた。そのとき、一人の男がふとこんなことを言いだした、「あの物くさ太郎はどうだろう」。

この三年来、あたらしの郷では、物くさ太郎という希代の怠け者をやしなっていた。それは泣く子もだまる地頭殿のお触れによるものであった——「この物くさ太郎に、毎日三合、飯を二度食はせ、酒を一度飲ますべし。さなからん者は、わが領にはかなふべからず」。どうしてこんなお触れがでるようになったのか、その事情はこうである。

物くさ太郎ひぢかす、かれは、竹を四本たて、こもをかけたみすぼらしい小屋に、きたない恰好をして、いつもごろりと寝ころんでばかりいた。なにひとつ自分でしようとはしない。食べ物がなければないで、四日でも五日でも寝たまま動くけはいさえない。かわいそうに思つて、餅をめぐんでくれる人があつた。太郎は五つのうちの四つを一度にたいらげた。それで満腹したかれは、残りの一箇を手にとつて、あおむけになつた胸の上で、はじいてみたり、鼻の油をぬりつけてみたり、なめてみたり、額の上にのせてみたり、遊んでゐるうちに、おもわずとりはずし、餅はころころと大道の方へころがって行つた。起きあがつてとりにくくのはおつくうだ、人が通るまで待つていようと、手もとにあつた竹竿で餅をねらう犬や鳥を追いはらいながら三日という日をすごす。三日たつたつぎの日、はじめて人がやつてきた。それもただの人ではない。郷の地頭、あたらしの左衛門尉のぶよりである。立派な馬にまたがり、五、六十騎の従者をしたがえたかれは、鷹狩の途中、偶然ここを通りかかった。太郎は、一行をうるんな目つきで迎えながら、起きあがりもせず、やおら鎌首をもちあげ、その餅を拾ってくれと地頭に呼びかけた。もとより地頭は目もくれない。太郎が憤然として言う、「あんなものくさは見たことがない。馬からおりて餅を

拾うくらいなんでもないではないか。あれでよくもまあ地頭がつとまるものだ」。相手は地頭である。ふつうならば、どんな目にあわされてもしかたのないところである。が、地頭はどう思ったのか、わざわざ馬を止め、かねて聞き知ったこの有名なものくさ男にことばをかけた。

「さておのれはいかやうにして過ぐるぞ」

「さん候。人の物をくれ候時は何をもたぶる。くれ候はん時は、四、五日も十日ばかりもただむなしく過ぎ候」

「さてはふびんの次第かな。命助かる支度をせよ。一樹の蔭に宿ることも、一河の流れを汲むことも、他生の縁となり。所こそ多きに、わが所領のうちに生れあふこと、前世の宿縁なり。地をつくりて過ぎよ」

「持ち候はん」

「さらば取らせん」

「ものくさく候ほどに、地もほしからず候」

「あきなひをして過ぎよ」

「もとで候はず」

「取らせん」

「今さらならはぬこと、知らぬこと、なりがたく候」

世にも珍妙なやりとりをしているうちに、ものずきな地頭は、太郎の徹底した変人ぶりに、ひよつと一種の好感をいだいてしまったらしい。「さてはかかるくせ者かな。いできらば助かるやうにせん」というわけで、みずから無為徒食の保証をかれにあたえる結果となったのである。いつにかわらぬ地頭殿の気まぐれに、村人たちは眉をしかめたけれども、しよせん「あはぬは君の仰せ」である。それからというものの、こんにちまで三年間、村人はこの厄介者を、ともかくもやしないつづけてきたのだった。

あのものくさがなんの役にたつ、村人は太郎を長夫に派遣したらという思いつきを、まじめにとりあげる気にはなれなかった。しかし、すでに万策はつきている。太郎のほかには暇とからだをもてあましている人間など、村には一人もないのだ。考えてみれば、ながいあいだ、無駄めしを食わせておいた男だ、こんなときの役にたてば面倒をみてやったかもあるし、荷厄介な無用者を村から追いはらってしまうにはまたとない機会でもある。ひとつあれをうまくまるめこんで、都へゆかせるとしよう。村の長老が説得に出むいた。助力を乞うたり、いままでの恩をきせたりしてすすめたが、さっぱり応じない。そこで一人の長老が、田舎とちがつて、都にはやさしいきれいな女がたくさんいる、そのなかから気に入った女を妻として、おまえも一人前になってきてはどうだ、と知恵をつけると、さすがのものくさがにわかになり気になって、即座に上洛を希望したという。村人は大よろこびで道中の費用を集め、とうとうかれを旅だたせることになった。「男どんだは江戸へ

もやれど、女のどんだはどもならん」(石川県河北郡雜謡『日本歌謡集成』卷十二近世篇)ではないが、こうして室町時代の「どんだ」も、まんまと都へやられるはめになったのである。

太郎を送りだした村人は、あの札つきの怠け者が、都へのぼってどんな長夫をつとめやう、どんな失敗をしでかすやう、想像すればするほどおかしくてたまらなかつただろう。われわれ読者の期待も、もちろんこの一点につながれている。しかし、読者の期待はみごとに肩すかしをくうし、村人は後日帰ってきた太郎の晴れ姿を見て肝をつぶす。

かれが出発してから、村にはふたたび静かな日々がもどってきた。なにかもともと通りであつた。もと通りでないのは、京へのぼった物くさ太郎だけであつた。物くさ太郎の内には、ヘンリー・ジキルが突然エドワード・ハイドに変身したのとおなじような転換の奇跡がおこっていた。すなわち、京へのぼるや、かれの性格は、俄然、従来の「ものくさ」をかなぐりすて、正反対の「まめ」に一変してしまった。かれは国司の館でひたすら「まめ」にはたらき、「すこしもものくさげなるけしきもな」かつた。「これほどまめなる者あらじ」、これが怠け者物くさ太郎の都で受けた賞讃であつた。

## 二

「ものくさ」がほんとうにまともになつたのでは、おもしろくもおかしくもない。多分そ

のためであろう、平出鏗二郎は『近古小説解題』に「物草太郎が上京して後は全く別人の如くなりて、少しも物ぐさからざるは面白からず」と評し、藤岡作太郎は『鎌倉室町時代文学史』に「はじめの方おもしろし、後半は物臭といふ性格を忘れたるが如し」と評している。だが、はたしておもしろいのははじめの方だけで、後半は全然つまらない話でしかないだろうか。おもしろさは、存外「前半と後半との運命の相違の意外な点に存する」（野村八良『室町時代小説論』）のではあるまいか。しばらく物語にそって太郎の行動を追うことにしよう。

三か月の長夫は延長されて七か月におよんだ。怠け者だったからではない。「まめ」で役にたつ男だったからである。国を出たのが春のおわり頃、七か月のつとめがあげ、そろそろ暇をもらう時期がきた。もう十一月であつた。かれは国をたつときに長老から言われたことばを忘れずにいた。よい妻をめぐって帰国することである。宿の主人に相談すると、主人はあきれて笑いながら、けつきよく「辻取り」をするよりほかにはあるまいと答えた。「辻取り」とは「男も連れず、輿車にも乗らぬ女房のみめよき、わが目にかかるをとる事」である。

## 一、辻捕事

右、違犯之者、任<sup>ニ</sup>御式目、於<sup>レ</sup>侍者、百ヶ日可<sup>レ</sup>令<sup>ニ</sup>籠居、雜人者、或剃<sup>ニ</sup>除片鬢片髮、或可<sup>ニ</sup>召籠<sup>一</sup>矣（「新御成敗状」、仁治三年正月十五日<sup>(2)</sup>）

世が世なら右の禁制が物をいう。しかし、乱世のいまはちがう。それどころか、「天下の御ゆるしにて有なり」、主人はそうかれに教えた。

月の十八日は観音の縁日である。<sup>(3)</sup>毎月この日、清水の観音は老若男女貴賤都鄙の参詣人が袖をつらねる。昔、武蔵坊弁慶が、清水の舞台で長刀を振りかざし、御曹子義経と渡りあつたのも、たしか六月の十八日、縁日の日であつた（『義経記』巻三「弁慶義経に君臣の契約申す事」）。

三月十八日に、ひめぎみたち、きよみづへ参り給はんとありければ（『ふせや草紙』上）とどろきのはしのかたを見やれば、おりふし十八日のことなるに、くはんをんにまいりげかうのきせんかずをしらず（『小おとこ』）

ふしみの里に年久しう此清水に月参りせるもの有、時もこそ有、時もこそあれ、正月十八日午の日の事なるに、洛中洛外、貴いやしき、此山に歩をはこび侍しに（『是樂物語』上）

氣にいった女をえらぶには観音の縁日がいちばん適當だ。物くさ太郎が、さしあたり十一月十八日を期して、清水での「辻取り」を決意した理由はここにあつた。のみならず――

のみならず、清水の觀世音は、俗に「妻觀音」とも呼ばれ（狂言「いもじ」）、祈念する者に妻をさずけたまうありがたい觀音であつた。その日、その所をおいて、最良の妻をうる機会があるはずはなかつた。

いよいよ十一月十八日である。清水の社頭についても、かれは狂言の主人公のように、觀音のお前にぬかずいて、「なにとぞよい妻を授けて下されい」などとは一言も祈らない。なにしろ、暴力でこのみの女を奪いとうというのだ。頼む力はただ自分だけにある。ずばぬけた主体性の持ち主だといわねばならない。

其の日のありさまは、信濃より年をへて着たりける、さゆみのかたびらの、なに色とももんも見えぬに、わら縄、帯にして、物くさ草履の破れたるをはき、呉竹の杖をつき、十一月十八日のことなれば、風はげしく吹きていかにも寒きに、鼻をすすりて、清水の大門に焼け卒都婆のごとく立ちずくみにして、大手をひろげて待つところに、参り下向の人々これを見て、あな恐しや、なにを待ちてかやうにはあるらんとて、みなくよけ道をして通れども、近づく者はさらになし。あるひは十七、八、二十よりうちの女房、五人十人うち連れく通れども、一目よりほか見ざりける。かやうに立ちたる事、あしたより其の日の暮るるまで、人数幾千万といふ事なし。あれも悪し、これも悪しとためらひるるところに――